民主主義革命の現段階におけるプロレタリアートの階級的諸任務について

（一）ロシアの民主主義革命は新たな高揚にむかってすすみつつあるが、このばあい、反革命のがわに立っているのは大資本家階級と地主階級であり、革命のがわにはプロレタリアートにつづいて小ブルジョアジーと農民との新しい諸層が立っている。

（二）ブルジョア革命におけるプロレタリアートの階級的利害は、有産階級をむこうにまわして、社会主義のためにもっとも成功的に闘争する諸条件をつくりだすことを要求する。

（三）これらの条件をつくりだし、確保する唯一の可能な方法は民主主義革命を最後まで遂行することである。すなわち、民主的共和制、人民の完全な専制、プロレタリアートに必要な最小限の社会的＝経済的獲得物（八時間労働日その他社会民主党の最小限綱領の諸要求）をたたかいとることである。

（四）民主主義革命を最後まで遂行できるのはただプロレタリアートだけであるが、その条件は、現代社会でただ一つ最後まで革命的な階級としてのプロレタリアートが多数の農民を自分のあとに従え、地主的土地所有と農奴制国家とにたいする農民の闘争に政治的意識性をあたえることである。

（五）民主主義革命の指導者としての役割は、その社会的＝経済的地位を引きあげ、その階級的自覚を全面的に発展させ、経済の分野はもとより広い政治的分野でも、その階級的活動を展開する可能性をプロレタリアートに最大限に保証する。

以上の点を考慮して、会議はつぎのことをみとめる。

（一）現在の歴史的時機におけるプロレタリアートの主要な任務は、ロシアの民主主義的変革を最後まで遂行することである。

（二）この任務をすこしでも軽視すると、労働者階級が、民主主義的農民大衆をひきいる人民革命の指導者から、自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーのしりについていく消極的な革命参加者になりさがることは避けがたい。

（三）党の全組織は、この任務を実現するためのプロレタリアートの活動を指導しなければならないが、プロレタリアートの自主的な社会主義的目標を一瞬もわすれてはならない。

第 12 巻 P135~136『ロシア社会民主労働党第五回大会のための決議草案』
1907 年 2 月 15 日～ 18 日（2 月 28 日～ 3 月 3 日）に執筆

ポイント

①プロレタリアートの階級的利害は、有産階級をむこうにまわして、社会主義のためにもっとも成功的に闘争する諸条件をつくりだすことであり、現在の歴史的時機におけるプロレタリアートの主要な任務は､ロシアの民主主義的変革な最後まで遂行することである。

②農民の闘争に政治的意識性をあたえることを軽視し、民主主義的変革を徹底して遂行することをすこしでも軽視するならば、労働者階級が、民主主義的農民大衆をひきいる人民革命の指導者から、自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーのしりについていく消極的な革命参加者になりさがることは避けがたい。

③党の全組織は、プロレタリアートの自主的な社会主義的目標を一瞬もわすれることなく、プロレタリアートに社会的＝経済的地位を引きあげ、その階級的自覚を全面的に発展させ、経済の分野はもとより広い政治的分野でも、その階級的活動を展開する可能性を最大限に保証するための活動をしなければならない。

民主主義革命期のプロレタリアートの階級的任務について

社会民主主義者はみな、わが革命が、進行中の社会的＝経済的変革の内容からして**ブルジョア**革命であると確信している。これは、変革が資本主義的生産関係を基盤として進行していること、変革の結果は不可避的に、ほかならぬこの生産関係のいっそうの発展であること、を意味する。もっと簡単に言えば、市場の権力、貨幣の権力への社会経済全体の従属は、もっとも完全な**自由**がえられても、また**土地**獲得闘争で農民が完全な勝利をおさめても、**依然としてのこる**のである。土地獲得闘争、自由のための闘争は、ブルジョア社会の存立条件のための闘争である。なぜなら、もっとも民主主義的な共和国においても、またどれほど「すべての土地が人民のものに」なろうとも、**資本**の支配は、依然としてのこるからである。

マルクスの学説を知らない人には、このような見解は奇妙にみえるかもしれない。しかし、その正しいことを納得するのは困難ではない。――フランス大革命とその結果や、アメリカの「自由な土地」の歴史などおもいだすだけで十分である。

現在の革命をブルジョア革命とよんだからといって、社会民主主義者はけっしてその任務を低めたり、その意義を小さくしようというのではない。逆である。プロレタリアートの歴史的にみてもっと古い敵が打倒されないかぎり、資本家階級との労働者階級の闘争は、十分にひろく展開され、勝利におわることができない。

だから、現段階におけるプロレタリアートの主要な任務は、もっとも完全な自由の獲得と、地主的（農奴制的）土地所有のもっとも完全な廃止である。半農奴制的な旧社会の完全な民主主義的破壊というこうした活動のなかではじめて、プロレタリアートは自主的な階級として十分に強力になり、「無権利の全人民」に共通な民主主義的任務のなかから自己独自の任務、すなわち社会主義的任務を十分に区別することができ、社会主義を目ざすもっとも自由で広範で強力な闘争の最良の条件を確保することができる。ブルジョア民主主義的な解放運動がまだ完了せず、最後まで遂行されていないときには、プロレタリアートはその努力をプロレタリアートの階級的任務、すなわち社会主義的任務のためではなく、一般民主主義的任務、すなわちブルジョア民主主義的任務のために、はるかに多く費さなければならない。

だが社会主義的プロレタリアートは、自主的に、かつ指導勢力としてブルジョア革命を遂行していくことができるだろうか？　ブルジョア革命という概念は、ブルジョアジーだけがそれを遂行しうることを意味するのではあるまいか？

メンシェヴィキはしばしばこの見解に迷いこむ。しかしこの見解はマルクス主義の漫画

である。その社会的＝経済的内容ではブルジョア的な解放運動も、その推進力の点ではブルジョア的ではない。その推進力となりうるのはブルジョアジーではなくてプロレタリアートと農民である。なぜそうしたことが可能なのか？　それは、プロレタリアートと農民がブルジョアジーよりも農奴制の残存物のために苦しんでいて、自由と地主の圧迫の絶滅とをいっそう必要としているからである。その反対に、ブルジョアジーにとっては、完全な勝利は危険をもたらす恐れがある。すなわち、完全な自由をプロレタリアートはブルジョアジーにむけて利用する、しかも自由が完全であればあるほど、地主の権力の絶滅が完全であればあるほど、それだけ容易に利用するのである。

ここから、ブルジョア革命を中途半端で、半ばの自由で、旧権力との、また地主との闇取引でおわらせようとするブルジョアジーの志向が生じる。この志向はブルジョアジーの階級的利害に根ざしている。それはすでに 1848 年のドイツのブルジョア革命にきわめて明瞭に現れたので、共産主義者マルクスは当時、プロレタリアートの政策の鋒先を「協定する」（マルクスの表現〔第３巻、359 ～ 365 ページ〕）自由主義的ブルジョアジーとの闘争にむけたのである。

わがロシアでは、ブルジョアジーは 1848 年のドイツのそれよりはもっと臆病であり、逆にプロレタリアートははるかに自覚をもち、よりよく組織されている。わが国ではブルジョア民主主義運動の完全な勝利は、「協定する」自由主義的ブルジョアジーに反対することによってのみ、民主主義的農民大衆が完全な自由とすべての土地を目ざす闘争でプロレタリアートの後につづくときにのみ、可能である。

第 12 巻 P334~335『土地問題と革命勢力』
『ナーシェ・エーホ』第7号、1907年4月 1 日

ポイント　――新しい民主主義革命との関連で――

新しい民主主義革命はアメリカ帝国主義とそれに従属的な同盟をむすぶ日本独占資本の支配を打破する革命であり、その先の社会主義を展望した革命である。

それは、そのための旗印を高く掲げ、国民の支持を集める努力をしてはじめて実現できるものであり、現体制の基で「建設的野党」として、チェック役の実績を積み重ねることによって実現できるものではない。

体制を変える理念のない野党の戦いは、国民の意識を現体制の中に眠りこませるだけであり、共産主義者の闘い方ではない。無知な、低い意識にすり寄るのではなく、国民を高い意識に引き上げることによってはじめて、信頼を勝ち取り、運動の中心に常にいて、社会の変革をリードすることができる。